慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	特集「変容するライフコースへの計量的接近」に寄せて
Sub Title	
Author	稲葉, 昭英(Inaba, Akihide) 夏, 天(Xia, Tian)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2023
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.28 (2023. 7) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 変容するライフコースへの計量的接近
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20230701-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集「変容するライフコースへの計量的接近」に寄せて

稲葉　昭英・夏　天

1980年代、90年代の日本の家族研究は家族が空前の大きな変化を経験しているという主張がもっぱらであった。社会学の視点からは私化や個人化、情緒化などの変化の指摘がなされたが、この時代には研究者が利用可能なミクロデータは存在せず、主張は直観的になされることがもっぱらで、経験的な研究は少数事例に基づくものか、政府やNHKなどの世論調査の集計結果を利用することが主流であった。計量的研究はよくても局所的な有意抽出標本を用いたものであり、そうした研究でさえもわずかにしか存在しなかった。

2000年代になり全国家族調査（NFRJ）や日本版総合的社会調査（JGSS）などの公共利用データが研究者にとって利用可能になり、ようやく大規模なミクロデータを用いた研究が可能になる。日本の計量的な家族研究のスタートはこのあたりだが、現在はそこから20年ほどしかたっておらず、その点では家族の計量的研究はそれほど長い歴史を有しているわけではない。とはいえ、この20年間で計量的な分析の水準は各段に上昇した。こうした中で、従来指摘されてきた諸仮説についての評価も変化してきた。

まず、概して計量的な研究は家族の変化の乏しさを指摘する。男性の家事参加や女性の出産後の就業などに関する研究は夫婦間の性別役割分業の強さ、変化の少なさを指摘し、世代間関係についての研究は、高齢者と有配偶の子どもとの同居が減少していることを指摘するが、基本的には世代間の相互作用は多く、高齢者の子どもとの同居率は他国に比較すればかなり高い状態が維持されていることを明らかにしている。言われているほど家族は変化していないのではないか？　むしろ、変化が少ないことが問題なのではないか。こうした指摘が計量的なデータ分析を行う研究者から指摘されるようになる。

こうした中で家族の変化をとらえる方法としてライフコースアプローチが注目されるようになった。もともと、人生の軌跡を意味するライフコースについての研究は、その人の生涯の中で社会がどのように経験されているかを追求するアプローチであった。ライフコースアプローチは家族研究とは独立な学問的背景をもつが、日本では変動をとらえる上での家族周期論の限界を感じていた家族研究者によって積極的に摂取されるようになる。森岡清美、正岡寛司、石原邦雄といった名だたる家族研究者が1980年代の半ばころにこのアプローチの有効性を主張し、研究を主導したが、この時点では利用可能なデータがほとんど存在しなかったこともあって顕著な成果があったとはいえない。

ライフコースをとらえる方法はさまざまだが、近年では定位家族の社会経済的状態とそこから育った子のその後のライフコースの関連を検討する方法が大きな注目を集めている。2015年の社会階層と社会移動全国調査（SSM）も、かつてのような世代間職業移動を中心としたアプローチから、定位家族がライフコース上に及ぼす長期的な影響の分析へと大きく方法論を変えている。むしろライフ

稲葉昭英・夏天「特集「変容するライフコースへの計量的接近」に寄せて」『三田社会学』第28号（2023年７月）１－２頁

コース研究で大きな成果をあげたのは社会階層研究であった。ライフコースに注目することで格差の態様やその変化を多面的にとらえることが可能になり、公共利用データを用いることによってより多くの成果が生み出されるようになったのである。

こうした背景のもと、あらためて家族研究におけるライフコースアプローチの成果を報告・周知することを目的として2022年７月に三田社会学会大会シンポジウム「変動するライフコースへの計量的接近」が企画された。本特集はその成果の一部を示すものである。

シンポジウムは以下の３つの報告から構成された。なお、司会は夏天（慶應義塾大学大学院）である。

1　余田翔平（国立社会保障・人口問題研究所）・木村裕貴（東京大学大学院）「未婚女性の選好と予期から見るライフコース変容」
2　吉田崇（静岡大学）「ライフコースの変容とキャリア形成格差」
3　稲葉昭英（慶應義塾大学）「結婚の脱制度化命題の検討」

いずれも大規模なミクロデータを用いた計量分析であるが、余田・木村報告、吉田報告は報告内容を他誌に投稿中であり、今回『三田社会学』への掲載は見送る運びとなった。余田・木村報告は国立社会保障・人口問題研究所による出生動向基本調査の「理想のライフコース」「現実のライフコース」の一致・不一致から家族の変動の方向性を検討するもので、家族の変動論に新しい視点を提供するものである。吉田報告は2015年社会階層と社会移動全国調査（SSM2015）データを用いて女性のライフコースに着目し、学歴と職業キャリアの関連を検討したものである。これらはいずれも非高学歴層におけるライフコース上の理想と現実との不整合や職業キャリア上の不利を報告する。稲葉報告は全国家族調査（NFRJ）の３つのデータを用いて、結婚を中心としたライフコースの変化を検討しているが、ここでも階層的な差異に大きな注目がなされている。

またいずれの報告も、いわれているほど変化が簡単に生起しているわけではないことを指摘する。そうした点では驚くべき内容ではないが、だからこそこうした研究の積み重ねが求められるのではないか。これまでの家族研究は厳密な経験的な分析と対応しない直観的な研究があまりにも頻出した。家族に関する言説は自らの家族経験や、自分の周囲の限られた情報からでも発信できてしまう危うさがある。こうした中で社会学者の役割は、直観的な印象論ではなく堅実な方法論によって家族に関する諸仮説を検証していくことであると私たちは考えている。したがって、大規模データを用いて堅実な分析を行った結果としてこのような結論が出されることは、たとえそれが驚くに値しない結果であっても大きな意味をもつといえるだろう。もちろん、計量的なアプローチのみが唯一絶対の方法ではないし、事象は複眼的にとらえていく必要がある。こうしたことを踏まえながら、しかしこの特集はあくまでも計量的なライフコースアプローチの可能性をあらためて訴えるものである。

（いなば　あきひで　慶應義塾大学文学部）
（Xia Tian　慶應義塾大学大学院社会学研究科）